

特集：「花子とアン」始まりと経過、そしてこれから

なぜアンだったのか、花子だったのか

村岡 恵理

前触れ

2013年早春、私は村岡花子の生誕120年の記念に河出書房新社から出版する『村岡花子と赤毛のアンの世界』の執筆と編集作業に追われていた。私の本の他にも奥田実紀氏の『図説 赤毛のアン』、そして川端有子氏編著による『赤毛のアンの手紙ブック』の同時刊行が決まっていた。出版界の現状は厳しい。1冊では目立たないが、3冊揃い踏みだと人の目にとまる。「なぜ今アンなのか？」という問いかけとなり、メディアにも取り上げてもらいやすくなる、というねらいらしい。現に担当編集者の村松恭子さんと松尾亜紀子さんは同僚たちに「何で今アンなの？」と首をかしげられていたそうである。翌年の2014年はモンゴメリの生誕140年でもあり、百貨店巡回展の噂も聞こえていた。その実現を切願しつつの明るい皮算用もなきにしもだったが、この発端は村松さんと松尾さんの間に起こった人生何度目かの「アン・ブーム」である。

村松さんは東日本大震災以来、気持ちが落ち込んで本が読めなくなったという。ふと『赤毛のアン』を手にとり、シリーズを再読していく

うちに再び原点に立ち返り、「曲り角の先にあるものを信じて」歩いていく力を与えられた。さらに拙書『アンのゆりかご』を読んで翻訳者村岡花子の生涯に触れ、花子が残した言葉やその多角的な活動を、解説や論考を交えて紹介する書籍の企画を通じた。村岡花子のエッセイ集の企画案も上がったが、こちらは私が100篇ほどを選んだ段階で保留。一方の松尾さんもアン・シリーズの長年の愛読者で、作品による自己回帰の感覚を共有していた。モンゴメリの美的センスと創作のディテールの詰まったスクラップ・ブックの解説本は彼女が7年もの間あためていたファン待望の書である。ふたりの熱意にいつしか私も巻き込まれていた。

2月に入り、ようやく校正の段階まで辿り着いた頃、新潮文庫の編集者川上祥子さんが電話で『アンゆりかご』がNHK連続テレビ小説の候補になっていると伝えてきた。ドラマ化の話は実は初めてではなかった。2008年にマガジンハウスから単行本を刊行した時、熱心な女性脚本家からドラマ化したいという相談があった。つい半年前にもNHKのBSプレミアムドキュメンタリードラマの女性プロデューサーから打診があったが、しばらくして「社内のコンペで負けました」という報告を受けたばかりだった。ドラマ化にはたくさんのハードルがあるのだろう。いずれにしても知らないところで決まる。ただ、私の描いた花子像が読み手の内部で躍動を始め、何かしら二次創作の意欲を掻き立てているのだとしたらそれは単純に嬉しくもあり、今の励みになった。

不思議なことにその頃からあちらこちらで風が立ち始めた。学研から子ども版の村岡花子の伝記を書いてほしいと頼まれる。2014年の百貨店巡回展が決定する。東京文京区にある弥生美術館から「村岡花子展」を開催したいという申



2013年～2014年にかけて刊行された「赤毛のアン」もしくは「村岡花子」関連書（一部）

し出がある。弥生美術館の学芸員で、明治から昭和にかけての少女雑誌の研究者でもある内田静枝さんには『村岡花子と赤毛のアンの世界』でも寄稿をお願いしていた。花子は中原淳一が手がけていた雑誌「少女の友」や「ひまわり」のブレインとしてブックレビューやエッセイを掲載していたので、それらの資料を調べているうちに内田さんにも私たちのブームが伝播したのだ。

ドラマ化内定、ブームの仕掛け

正式にドラマ化内定の知らせを受けたのは3月1日、「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」の活動として東日本大震災で保護者を失った子どもたちに特化した募金を募り、その一部を姉と連れ立って宮城県の施設に届けに行った帰りの車中であった。私は携帯電話を切った後、アンを読んで再び元気を取り戻したと語っていた村松さんのことを思い出した。なぜ今アンなのか、そして花子なのか。本を通して希望を贈り続けた花子の姿、アンの言葉は被災した人々の心をも本当に癒すことができるのだろうか。

ドラマ化が内定した後も記者発表までは口外しないよう言い渡されていた。情報が洩れて取り消しになった例もあるというから大変である。当初、4月末に予定されていた記者発表は連休明けになり、5月の末になり、延びに延びて結局は6月25日に実施された。話したいのを我慢していた私の口もカモノハシのように伸びていたような気がする。

2014年前期NHK連続テレビ小説（3月31日～9月27日）のタイトルは「花子とアン」。総括プロデューサー加賀田透氏、脚本は中園ミホ氏が手がける。主演の村岡花子役は吉高由里子さん。先んじて決まっていた巡回展の企画会社（ビーンズ）と弥生美術館が大きな追い風を得たのは言うまでもない。花子の生地である山梨県甲府市でもドラマの宣伝を兼ねたのぼり旗が立ち、PR活動が始まった。山梨県立文学館にはゆかりの作家のひとりとして村岡花子の常設コーナーがある。山梨県立文学館も花子の文学的な足跡を辿った独自の企画展を開催することになった。主な企画展のうち、最後に決まったのは銀座の教文館である。実際花子が編集者として勤めていたキリスト教の流れを汲む出版社兼書店。関東大震災で倒壊したが、その後再建され、戦災を免れた歴史ある社屋が現存する。それぞれに準備を進める他方では、各出版社も



NHK連続テレビ小説「花子とアン」ポスター
NHK提供

関連書籍の刊行に動き出した。

村岡花子訳のアン・シリーズの版元である新潮社はビジュアル・ブック『花子とアンへの道本が好き、仕事が好き、ひとが好き』を出版。河出書房新社では保留になっていた花子の随筆集の企画が通り、当初選んだ100篇を『腹心の友たちへ』と『曲り角のその先に』に振り分けた。その後、記念館の棚の奥から見つかった「未発表」の直筆原稿と随筆を、随筆集としては3冊目の『想像の翼に乗って』に納める。さらに戦前の童話を集めた『たんぼの目』、内田静枝氏編集によるビジュアル解説本『村岡花子の世界 赤毛のアンとともに生きて』を刊行した。NHK出版からは絵本『アンを抱きしめて』（絵・わたせせいぞう／文・村岡恵理）。講談社からは、かつて最もよく読まれていたアン・シリーズ（挿絵・鈴木義治）の白と紫の装丁をリバイバルした『赤毛のアン の名言集』と、子ども向けの青い鳥文庫『赤毛のアン』の愛蔵版（クラシックな茶色の装丁に三方金）の美しい2冊。かつての愛読者と現在の幼い愛読者へ、ずっと手もとに置いておける本をという、編集者の願いと作品への愛情の「かたち」であった。他にも花子の翻訳作品の復刊や既刊、さらにムック本やプリンズ・エドワード島の写真集なども多数増刷されて書店には特設コーナーが設けられた。

放送開始、ブームの到来

放送開始とともに企画展も順次開幕した。高視聴率が功を奏して4つの展示会場はどこも盛況だった。ドラマ「花子とアン」は視聴者をつなぎ止める仕掛けや魅力に富んでいたのだろう。一方でその仕掛けや魅力のために、多くのフィクションが加えられていた。関連本や展示会は、



日本橋三越における「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」テープカット 2014年5月21日 左から3人目より、村岡恵理氏、ケイト・M. バトラー氏、村岡美枝氏

視聴者の旺盛な知識欲に応え、実像を伝える大きな役割を担ったと思う。特に、学生時代の花子がカナダ人宣教師から英語を叩き込まれる傍ら、白蓮の導きで短歌の佐佐木信綱門下に入門し、日本語の表現力を研鑽したこと、そこで出会った片山廣子に生涯にわたり大きな影響を受けたことはドラマでは割愛されていた。また、花子を生かし、支え続けたのは当時のキリスト教プロテスタント派のネットワークだったが、花子とキリスト教との深い関わり、信仰についても描かれなかった。この重要な2点、佐佐木信綱門下周辺については山梨県立文学館が、またキリスト教との関係については教文館が、それぞれ重点を置いて発信した。

他にも花子の母校、東洋英和女学院、教師時代を送った山梨英和学院、結婚してから亡くなるまでを過ごした東京大田区でもパネル展や催

しが開かれた。白蓮の再婚相手、炭鉱王伊藤伝右衛門をモデルにした伊藤伝助が吉田鋼太郎氏の好演で大変な人気となり、福岡県、飯塚市の伊藤伝右衛門邸も連日、観光バスが何台も押し掛ける大盛況ぶりを見せた。

アンの言葉の力

私は20年以上にわたり「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」の活動を続けてきたのだが、悔しいけれど一翻訳家の生涯やその資料にこれほどの注目が集まったことはない。フィクションが実像を伝える機会を与え、また実像がフィクションの楽しみを倍增させるという相乗効果となっていった。お祭りは終わったが、文学者としての村岡花子についての本格的な研究はむしろこれが始まりであると思いたい。

なぜアンだったのか、そして花子だったのか。おそらく私たちには非常にシンプルな言葉が必要だったのだ。

花子は本とペンによって近代を生き抜く力を与えられた。本とペンは夢と知性の象徴であり、翼に変わる、ということ村岡花子は体現している。花子が伝えたかった本の力、そして「曲り角の先にもきっと素晴らしいものがある」というアンの言葉が、ひとりでも多くの人の心に残り、未来への灯となることを願っている。

(*この文章は、山梨県立文学館発行「資料と研究」第20輯(2015年3月31日刊)所収の「なぜアンだったのか、花子だったのか」を一部修正したものです。)

村岡花子文庫寄贈に寄せて

村岡花子の翻訳家、児童文学者、社会活動家などの幅広い生き方を決定づけたのは10年の日々を過ごした東洋英和の教育であったことは、みなさんご存知の通りです。花子が東洋英和で得たものは、学問だけではなく、カナダ婦人宣教師たちから受けた感化でした。このスピリットは生涯にわたり、花子の中に生きていました。

私たちはそのことを第一に考え、このたび、大森の自宅に長く保管し、さらに1991年からは「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として一般にも公開してきた花子の著作、蔵書、書簡類、児童書さらには書斎の家具なども東洋英和女

院に寄贈いたしました。

『赤毛のアン』初版のあとがきには「…この訳業を麻布の丘の母校にこもる若き日のおもいでと、今ここに学びつつあるわが心の妹たちにささげます」と書かれています。

学院に託すことにより、これらの資料がより多くの人の目に触れ、花子の息遣いや志が長く、後世の人びと、とりわけ母校に学ぶ若い妹たちに親しまれていくことを願うものです。おそらく祖母も母校に帰れることを喜んでくれていることと信じています。

(作家 高等部卒)

「花子とアン」フィーバーと向き合っ

—史料室からの報告—

酒井 ふみよ

はじめに

2013年6月ごろより、本校史料室はNHK連続テレビ小説「花子とアン」の影響を受けて多忙を極め、ドラマが終わった今も新しい局面での忙しさが続いています。渦中にあった時期に史料室はどのような対応をしたのか、どのような発見があったのか、そして収束を迎えてどのような結果がもたらされたのかを記しておきたいと思います。

学院史料展示コーナーにおける展示：「東洋英和と村岡花子Ⅱ」 2014年3月11日～9月30日

村岡花子に関する展示は、既に2008年11月～2009年3月まで「東洋英和と村岡花子」展示を行っていました。そこで今回は第2回ということで重点は花子の卒業後に置き、『東洋英和女学校五十年史』の編纂や同窓会副会長を務めるなど、彼女が同窓生としていかに母校に貢献されたかを展示しました。またよそで開催される企画展と一線を画して英和ならではの展示を心がけ、同窓会報や「東洋英和新聞」など学内機関誌に掲載された花子の寄稿などを手に取って読めるように工夫しました。拡大コピーしたもの、1枚ずつラミネートしたもの、その他ファイルしたものをショーケース上に置きました。パネル等の制作はこれまですべて手作りしていましたが、この企画展でそれも最後となりました。期間はドラマ放映期間に重ねました。

一般公開であることが初めて意味をなし、150日間で合計6,468名の方が見学に訪れました。期間中は常にと行っていいほど見学者が熱心に展示をご覧になっており、後半が特に多く9月の一日平均はなんと77名でした。バスを仕立てて新聞社などがツアーを組んで見せることも数回あり、フィーバーの熱さに驚かされました。

展示をご覧にいらして、花子の時代におばあ様や親せきの方が在籍されたことをお話くださる方々が時々見え、卒業生の血が脈々と続いていることを感じました。これまで知らなかった卒業生の活躍—美容学校を創立された網蔵妃葉子氏、加茂令子舎監の妹で同窓会副会長でもあった松野志う氏、山梨英和で教えた後、大分

で町議会議員をされた山本琴氏のほか、英語が得意で、家庭にあって凛とした生き方を貫いた同窓生の方々の姿を教えていただけたことは大きな収穫でした。

アンケートによると、この学院展示によって、村岡花子をはぐくんだ東洋英和の教育の素晴らしさを感じたり、花子の母校愛を知ることができて良かったという方が多く、また卒業生からは母校を誇りに思えたという感想を複数いただきました。中には、英語表記が欲しいという指摘があり、今後への課題となりました。

史料室への照会と対応

1. NHKの番組制作のための質問への対応

……2013年7月～2014年1月上旬

最初に年史類の提供、古い写真の画像提供をしました。その後、具体的に花子の在学当時の学校の様子についてなんでも教えてください、という感じでしたので、特に校舎の造りや女学生の服装、寄宿舎生活など、次々に来る細かい質問には知りうる限り、資料をあさって答えました。

花子の時代は、学校の中に寄宿舎がありましたから、生徒たちは宣教師の先生方とともに一日中キリスト教の教えに従って暮らしていました。ですから、礼拝のこと、麻布教会（現・鳥居坂教会）への出席、当時使われていた聖書やよく歌われていたであろう讃美歌など、中高部の先生にもご相談してお答えしましたが、番組であまり活用されなかったのは残念でした。



学院史料展示コーナー「東洋英和と村岡花子Ⅱ」展

ドラマで強いインパクトのあったミス・ブラックバーンことミス・ブラックモア。“Go to bed!”のセリフは中学生の間でも流行ったそうですが、花子自身や何人もの方々が敬愛を込めて随筆に書き残していたおかげで、実像に近かったのではないのでしょうか。

花子も写っている1914年の絵葉書は大いに活用されました。ただ、カラーではないのでドラマの美術担当者からは、色合いを知りたいと尋ねられても答えられません。様々な方々の思い出の記述に「色」が出てこないかばかり探した時期もありました。

2. 各企画展への対応

……2013年10月～2014年11月

限られた資料をどう提供するか、振り分けに苦慮しました。一部はレプリカを作成して対応しました。簡単に紹介します。

○大田区立郷土博物館：(村岡花子常設展の拡充) 2014.1.25～3.2

【資料貸出28点、画像提供多数】

○ビーンズ：「日加修好85周年記念 モンゴメリと花子の赤毛のアン展」2014.3.27～11月全国のデパートを巡回。(総観客数19万人) 東京は5.21～6.3 日本橋三越本店にて。本校も協賛、生徒・保護者に招待状配布、学院案内パンフレットおよび大学案内をおき、『カナダ婦人宣教師物語』販売委託。展示内容は一般入門編。モンゴメリ、カナダ紹介もあり。

【資料貸出28点、画像提供多数】

○山梨県立文学館：「村岡花子展ことばの虹をかける～山梨からアンの世界へ～」2014.4.12～6.29 (入館者3万5千人) 学術的展示。特に花子の短歌に初めて注目。図録が秀逸。【資料貸出39点、画像提供25点】

○弥生美術館：「村岡花子と『赤毛のアン』の世界展」2014.7.4～9.28 (入館者3万人) 少女雑誌への花子の貢献紹介が傑出。【資料貸

出26点、画像提供14点】

○教文館：「村岡花子 出会いとはじまりの教文館」2014.5.31～7.14 (入場者1万5千人) 矯風会、キリスト教出版との関わり、大正期の銀座紹介に特徴。【資料貸出10点、画像提供24点】

3. 村岡花子関連の個別照会・取材への対応

……2013年6月～2015年7月

【雑誌・TV番組・講演等製作のための取材：16件、村岡花子関連記事校閲(外部)：4件、村岡花子関連画像提供：42件、学院関係画像提供：29件】

「花子」関連書籍、雑誌特集記事のための取材・画像提供依頼、「花子とアン」視聴者一般人からも質問は電話とメールで舞い込みます。たいてい待ったなしです。一日に何件も重なることもあり、調査が必要なものもありましたので、それをほぼ一人でさばくのは本当に大変でした。雑誌、特に週刊誌の場合、信じられないくらい制作期間が短く、締切が迫った中で似たような企画の取材依頼がたびたびあり、雑誌編集の裏方を覗いた感もありました。質問の内容は大体、花子さんはどのような学校生活を送ったのか、東洋英和はどのような学校だったのかというものでした。

画像提供に関しては、2011年から学院の古い写真のデータベース化に取り掛かり、データ検索が可能になっていたのは、我ながら先見の明があったと自負しています。データにしていなかったらお手上げだったでしょう。

4. 本校史料展示に関わる照会への対応

……2014年3月～9月末

展示全般および休館日の案内、道案内。ほとんどが電話で、特に朝日新聞7月26日Around Tokyoに短く紹介記事が掲載された後は連日10件、20件の電話の問い合わせに、仕事が手につかない状態でした。反面、数回催されていた麻布地区の街歩きツアーに1回同行させていただき、本校展示を地域の方々にご案内できたのは楽しい出来事でした。

5. 村岡花子以外の学院の歴史についての照会への対応

特に学内、同窓生からの照会・依頼が増えました。「花子とアン」をきっかけとして、学院の歴史に興味を持つようになった英和関係者が増えたことを実感し、これは大きな喜びです。同窓生と教職員に関する、ご親族からの問い合わせも急増、中には情報提供もありました。また、山梨英和学院中学校・高等学校同窓会とも、交流が増えました。



各地で開催された企画展のチケットなど

学院の広報活動への協力

学校案内や、ホームページの特設サイト「『花子とアン』からみる東洋英和女学院」立ち上げ（現在は「東洋英和と村岡花子」に改編）に情報提供、校閲などをして協力しました。ヨコハマ大学まつり（2014年10月4・5日）に「村岡花子と東洋英和」の展覧もしました。

フィーバーによってもたらされたもの

「花子とアン」が放映されなかったら人知れず埋もれる運命にあった一冊のアルバムが、史料室に届けられ、現在展示中です（12月18日まで）。それは、山梨英和時代から花子の親友であった宣教師、ミス・ストラザードのアルバムです。

このアルバムは、カナダ東部ノバスコシアで、ガレージセールに出ていたものですが、番組を視聴していた、昔麻布にお住まいだったカナダ在住の女性によって、ここに写っているのは東洋英和女学校の生徒と宣教師ではないか、と気づいてもらえたことから判明し、海をわたって直接届けられたものなのです。卒業式の記念写真や人物のスナップばかりでなく、劇のために扮装した生徒たちや初期の東京女子大学校舎など、写真の保存状態は大変良好です。今この時期に英和にやってくるとは、何か不思議な糸が繋がっていたように思えてなりません。

また、NHKの要望「花子の時代の書籍室の蔵書はありませんか？」に応じて探した、旧高等部図書室蔵書の洋書群の発見も書き落とせません。廃棄されたはずの古い洋書が、大学院図書室の電動書架に眠っていたとは（?!）うれしい驚きでした。「花子とアン」の中でもっと書籍室の場面が欲しかったです。

見学者やそのお知り合いからは、愛蔵されていた「アン」シリーズを数冊受贈しました。

今とこれから

村岡花子が卒業生であることは、英和関係者ならばたいの人が知っていました。しかし、彼女が給費生だったこと、同窓会副会長だったこと、新潮文庫4冊分の英和への印税寄付が今に至るまで継続していることなどは、これまであまり知られていなかったでしょう。ドラマのおかげで、英和関係者自身がもう一度村岡花子の業績に目を向けることになったのです。

「花子とアン」で「村岡花子の母校・東洋英和」の知名度が高まったので、それを広報で活用しようという学内の動きも起こりました。

最初大学のホームページに「東洋英和と村岡花子」の特設サイトが作られ、後に学院のホームページに移されました。面白いページなので、随時トピックスにお知らせを出しながら今後も活用していきたいと思っています。

そして何よりも、村岡家から花子の蔵書を英和に寄贈する、と申し出があったことは重大な局面でした。うかがったときは、うれしさの反面、私たちに託される重い責任にお応えできるか、という重圧で相反する気持ちを味わいました。

お申し出を学院が有り難く受けることとなり、どう活かすかが話し合われました。その一環として展示コーナーの改装が行われ、知的で洗練された空間が生まれました。展示コーナーには、今も毎日一般の方々が熱心に見学していかれます。今後は企画展と連動して何らかのトークイベントができれば、もっと多くの方々に深く理解してもらえる、と夢は広がります。

また、史料室では、寄贈された村岡花子文庫を保管し展示に供するだけでなく、今後の村岡花子研究につなげられるよう、目録作成という将来に向けた作業を始めました。この作業には、卒業生の大学生が関わって下さっています。

そして、これまで悲願であった史料室所蔵資料の目録作成にも予算がつき、取り掛かろうとしています。地下2階の穴倉(?)にもついに陽が射した!と感慨深いものがあります。本学院の歩みは、カナダとの交流に始まり、近代女子教育史、キリスト教教育史の一端を担っています。数年がかりの取り組みになりますが、所蔵資料の目録化などの整備は学術的にも大きな意味があるものです。

村岡花子フィーバーに翻弄された2年間でしたが、なんとか曲がり角を回り、資料整理と活用には光が見えてきました。感謝をもってご報告いたします。（史料室嘱託）



学院ホームページ「東洋英和と村岡花子」の冒頭

「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」の紹介

谷川 祐子

2015年4月15日、六本木校地の本部・大学院棟1階に「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」がオープンしました。日本中を楽しませたNHK連続テレビ小説「花子とアン」放映直前の2014年9月に、村岡美枝、恵理姉妹が深町正信院長を訪問し、村岡花子関連資料を学院に寄贈したいご希望を伝えられたことが発端でした。

村岡家が村岡花子晩年の書斎を「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」とし、先生の著作や蔵書のみならず同時代の児童書を大切に保存し公開されてきたという実績を学院が継承し、学院創立130周年記念事業として、2014年度に資料を受け入れることと、新しい展示コーナーの開設を決定しました。

今までの「学院史料展示コーナー」を、村岡花子の書斎の雰囲気が少しでも再現できる場所となるよう拡大改装し、名称も変更しました。

3月24日、村岡花子の著作や蔵書、書簡類、原稿、書斎の家具、身の回りの品々(第一回目)が学院に到着しました。花子は『赤毛のアン』初版本のあとがきに、「この訳業を麻布の丘の母校にこもる若き日のおもいでと、今ここに学びつつあるわが心の妹たちにささげます。」と記しています。その麻布の丘の母校に資料が届けられました。花子の心の妹たちのためにお役にたてるようにと襟を正した瞬間でした。

「学院資料」常設展示では学院の年表を掲げ、ミス・カートメルが太平洋を渡った時に使用した木製のトランクや日本からのお土産としてカナダに持ち帰った櫛やペン皿などを展示しています。

「村岡花子文庫」常設展示では花子愛用の書き物机と書棚と共に、書斎の様子が再現されています。また亡くなられた息子さんの名前を冠した村岡家の子ども図書館にちなみ、自由に本を手にとって読める「道雄文庫ライブラリー」もあります。また村岡花子を映像で紹介しているコーナーもあります。

常設展示に加え年に数回内容を入れ替え、企画展を行います。第1回目は村岡花子文庫展示コーナーが「村岡花子『運命の一冊』展」と題し原書の *Anne of Green Gables* と *THE PRINCE*

AND THE PAUPER、そして『赤毛のアン(初版本)』、『赤毛のアン』の翻訳直筆原稿などを展示しました。今後も村岡家にも企画に携わっていただき、いろいろな角度から村岡花子像を紹介していきたいと思っています。

学院資料コーナーでは引き続き史料室にある多くの資料を、興味を持っていただけるようなテーマで紹介していきたいと考えています。

学院ホームページの「東洋英和と村岡花子」というサイトでは最新情報をお知らせしています。また企画展ごとに展示内容を記載した簡単なチラシを作成し、見学者の方々の理解を深めていただくとともに、展示記録としても役立てたいと思っています。

今後「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」を訪れた方々が、村岡花子が仕事と家庭を両立させ著作を通して多くの夢を人々に与え続けた生き方を学べるよう、また東洋英和の関係者の方々は学院資料から建学の精神に触れその一員であることの誇りを深く思う場所となるよう、そして広く地域や社会に貢献できる場所となるように活用していきたいと思っています。

(院長室・史料室)

見学可能日時：月～金曜日 9:00～20:00

土曜日 9:00～19:00

日曜日・祝日・長期休暇中はお休みします。

企画展等詳細については

URL http://www.toyoeiwa.ac.jp/muraokahanako_bunko/index.html をご参照下さい。



学院資料・村岡花子文庫展示コーナー
村岡花子文庫常設展示

〈資料紹介〉 27

「村岡花子文庫蔵書」～目録作成の過程も含めて～

水谷 悟

2015年3～6月、これまで赤毛のアン記念館・村岡花子文庫で所蔵していた花子関係の蔵書が本学院に寄贈された。この蔵書は「村岡花子文庫蔵書」として本部棟に設置された「収蔵庫」で保存・管理されている。今夏、その目録作業が高等部を卒業した学生たちの手によって実施されたので、「そこに至る道のり」「目録作業の概要」、そして蔵書の内容を紹介していきたい。

そこに至る道のり

「史料整理の仕事、是非やってみたいです！」3月に中高部で実施した社会科学習旅行で京都・奈良を訪れている際、卒業したばかりの高3の生徒が口にした一言である。文学部に進学するという彼女らに村岡花子の蔵書が寄贈されることを話したところ、予想外に嬉しい答えが返ってきた。この言葉が後押しとなり、史料整理および目録作成の作業が実現する運びとなった。それは村岡花子が『赤毛のアン』初版のあとがきに記した「心の妹たちへ」の思いを中継ぎし、次の世代に伝えていければとの思いからであった。英和の卒業生に史料整理のお手伝いを募ってみると、思いの外快い返事が次々と届いた。

目録作業の概要

こうして2015年8月17日(月)から28日(金)の間のなるべく多く人が集れる6日間に、計7名の学生たちが作業を手伝ってくれるなか、目録作成の作業は次の4段階に分けて行われた。

- ① 史料が移送された時点での現状をできる限り回復し、仮番号を付すこと
- ② 段ボール箱ごとに蔵書の情報をデータに入力すること
- ③ 作成したデータを年代順に並び替え、保存箱に入れ直すこと



高等部卒業生による村岡花子文庫 目録入力作業

- ④ データを再度確認し、番号を付すこと

作業は、学生2人1組で行い、まず①と②の行程を同時に進めながら、仮番号(1～1133)を確認しつつ「蔵書」の所在を1点ずつ確かめ、詳細なデータを更新していった。「蔵書」の運搬を請け負った業者にあらかじめ書棚の上段左側より仮番号を付し写真データを撮ることを依頼し、運び入れられた段ボール箱に便宜上A～Z+「AA」を記した。書籍のうち洋書は後回しとし、和書の「書名」「書名読み」「シリーズ名」「著者名」「読み、原級」「訳者」「出版地」「出版社」「出版年月日」「形態」「箱(の有無)」の12項目にわたりデータを入力した。

学生諸君の作業が迅速であったため、第一次受け入れの和書を網羅する形で目録化することができた。作成したデータを出版年代順に並び替え、仮番号の欠番や原本の確認できない不明分を抜いた結果、第一次受け入れとして総計1068冊に及ぶ蔵書が寄贈されたことがわかった。

蔵書の概要

作業から明らかになった「蔵書」1068冊の出版年代は、1876年(明治9)から始まり2011年(平成23)に至る、135年の長きにわたっている。花子本人は1968年(昭和43)に75歳で亡くなっているため、それ以降の書籍については娘のみどりさん、または孫の美枝さん、恵理さんによって記念館設立のタイミングなどで「書棚」に加えられたものと推察するのが正しいだろう。

これらの「蔵書」を出版年代別に見てみると、次の表の通りである。

表の数値のみを見れば、関東大震災によって夫の印刷会社が倒産し、教文館で翻訳と編集を

【表】「村岡花子文庫蔵書」出版年代(2015年9月時点)

年代	冊数	花子の年齢	年代	冊数	花子の年齢
1870～1879	1	—	1950～1959	396	57～66
1880～1889	0	—	1960～1969	259	67～75
1890～1899	0	0～6	1970～1979	32	—
1900～1909	4	7～16	1980～1989	14	—
1910～1919	12	17～26	1990～1999	10	—
1920～1929	55	27～36	2000～2009	13	—
1930～1939	112	37～46	2010～2015	1	—
1940～1945	76	47～52	不明	7	—
1946～1949	76	53～56			

手がけるとともに、青蘭社を自宅に設立し、長男道雄の早逝の悲しみをマーク・トウェイン作『王子と乞食』の翻訳で乗り越えた1920年代に蔵書が増え始めている。そして、婦人参政権獲得運動に力を注ぎつつ、エレナ・ポーター作『パレアナの成長』を翻訳し、JOAKの嘱託となり「子供の新聞」コーナーを担当し始めた1930年代に戦前の一つのピークが形成されている。

その後、アジア・太平洋戦争を経て、国内の出版状況が厳しくなるなかで蔵書の増加冊数は抑えられている。その出版事情は戦後の占領下でも継続され、朝鮮戦争を経て、日本社会が「特需」の恩恵を被りつつ、国際社会に復帰するなかで、L.M.モンゴメリ作『赤毛のアン』が世に送り出された。その後、日本社会が高度経済成長期を迎えるのと歩を合わせるかのように、花子自身の仕事も増え、ウィーダ作『フランダースの犬』、エレナ・ポーター作『くり毛のパレアナ』、モンゴメリ作『風の中のエミリー』などが次々と発表され、それに伴い蔵書数も関連図書館を中心に増加していったと思われる。勿論、書籍というのは、必ずしも出版年と購入した年代とが重なるとは限らないので、これはあくまで参考程度の情報と言えよう。

「運命の一冊」

さて、蔵書内容に目を向ける時、その筆頭は名作『赤毛のアン』を生んだ「運命の一冊」、1908年出版の*Anne of Green Gables*であろう【番号5】。次に、太平洋戦争の開戦と敗戦を挟み、13年の時を経て1952年5月10日付けで三笠書房より日本で初めて刊行された『赤毛のアン』が収められている【番号425】。「蔵書」からわかることは「赤毛のアン」シリーズが人気を博し、ポプラ社、旺文社、偕成社、講談社、集英社、小学館、文研出版、岩崎書店、新潮社の各社から出版されていた事実である。ここで面白いのは、花子本人がそれら「赤毛のアン」シリーズの表紙に「保存版一九五五、十二月 第一版」「函入り初版」などと朱書きしていることである【番号520】。膨大な書籍や資料に囲まれながら、家事と原稿の締切に追われて翻訳をしていた女流文学者の姿が垣間見えてくる。

「腹心の友」たちとの交流

続いて目を引くのが、白蓮（柳原燐子）・片山廣子といった東洋英和出身の「腹心の友」との交流を思わせる蔵書である。

まず柳原燐子の著作は5冊収められている。白蓮の作品としては第一歌集『踏絵』が知られているが、「蔵書」には伊藤燐子時代の『幻の華』【番号15】のほかは、燐子が伊藤藤右衛門のもとから出奔し宮崎龍介と一緒にした後、病身の龍介に代わり一家を支えていた頃の作品であった。『則天武后』（改造社）【番号24】、『流転』（不二書房）【番号57】、『筑紫集』（萬里閣書房）【番号58】、『荆棘の實』（1928年9月、新潮社）【番号61】。

次に花子にとって英米文学の道を拓いてくれた片山廣子の著作として『翡翠』『燈火節』『歌集 野に住みて』の3冊が収められている。なかでも『翡翠』は佐佐木信綱の主宰する短歌結社「竹柏会」の出版部から1916年3月に刊行されたものである【番号10】。

他にも、石井桃子、今井邦子、生方たつえ、五島美代子、林芙美子、深尾須磨子、森田たま、吉屋信子などの著作が数多く収められており、世代や期間に多少の幅があるとは言え、花子の交流していた女流文学者たちの存在とその人脈を考える上で示唆に富んでいる。

女流文学者の蔵書形成

交流のあった人々の著作群とは別に、翻訳文学を主とする村岡花子ほどのような蔵書を形成し、作品を生み出していったのであろうか。無論、洋書の全貌を明らかにした上でなければ片手落ちになるのであるが、あえて資料紹介の範囲で和書からわかることを述べてみたい。

漱石、鴎外、藤村ら近代日本の文豪と呼ばれる作家たちの全集を揃える一方、「少年少女世界文学全集」、「世界童話体系」「少女世界名作全集」「少年少女動物名作全集」「世界少女名作全集」「日本幼年童話全集」などのシリーズ作品が顕著である。花子本人が訳者の一人として入っているという事情もあるが、その対象は英米文学を軸に据えながらも、ヨーロッパ各国、日本、中国、インドなどのアジア圏に及び、読者の対象としては「少年少女」「幼年」、なかでも「少女」が常に意識されて設定されているのが窺い知れる。ほかにも蔵書群を詳しく分析していけば、村岡花子のみならず近現代日本の女流文学、翻訳文学を考察する上で看過できない特筆すべき項目が浮上するであろう。今回の目録作成の作業がその端緒となれば幸いである。

（中高部社会科教諭 史料室委員）

〈思い出の先生がた〉30 鵜沼さき先生

鵜沼さき先生の思い出

鵜沼先生は、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）卒業後、県立女学校・都内私立女学校を経て、大正13年（1924年）本校（中高部）に就任され、以後42年間の長きに亘り、勤務されました。

私は、同じ国語科の一員として多面にわたり先生のご指導を受けましたのは、最後の10年程でした。

私が英和に奉職した年、先生は高三担任で、かつ夏期野尻キャンプの副ディレクターとして遅くまで仕事をなさっておられたお姿、鎌倉からの通勤も思い合わせ、印象深いものでした。

先生は、昭和10年頃の東京YMCA野尻キャンプ（35日間）にキャンプ・マザーとしての指導、昭和13年野尻湖畔宮沢での英和キャンプ、戦後の毎夏のキャンプ等、長年のご経験をなさっておられたことを後に知りました。

戦時中、とりわけ戦争末期の勤労奉仕は、特に心労の多かったこと、その頃のことを淡々と語られる方でしたが、劣悪な環境の中で終始毅然とした態度で生徒を守られた先生でした。

少女らに万一のことあらん時

我も生きずと思ひたる日々

遺稿集『手函』より

次々と退職される先生方もあり、学校が次第に手薄になっていく状況だったようですが、先生は最後までとどまり、校務を全うされました。

国語科の主任であり、文学についての鑑賞も深く、文才豊かな先生に親しく接する機会を与えられたことに心から感謝しております。

教科指導、生活指導の面では、厳格な先生でしたから、一部の生徒からは敬遠される向きもあったようですが、生徒に対する思いやりが深く、優しい心配りをなさっていました。このことは、卒業生に対しても同じで、いつも心にかけておられる先生でした。

昭和30年代、卒業式の後、謝恩会二部として、卒業生のグループによるスタンツ・演奏・舞踊等がありました。教師も演目を用意する事になっていましたが、その内容・出演者更に構成を考える中心になるのは鵜沼先生でした。先生



鵜沼さき先生

の隠れた一面でもあったのでしょうか。

退職された後、戦争で学業を中断せざるを得なかった卒業生から懇請され、週1回「古典のお集まり」がありました。鎌倉から同窓会館までおいでになるだけでも大変かと思いましたが、たまたま学校にお立ち寄りくださった折、「古典を読むのは本当に楽しいね」と、卒業生たちと文学論・人生論を語り合うことがとてもうれいようでした。お亡くなりになる直前まで続けられたそうです。

昭和20年代・30年代の英和教育を堅実なものにくださった先生として思いを新たにしております。

文 黒川 信也（元高等部長・現監事）

鵜沼 幸（うぬま さき）先生

—略歴—

- 1897年1月4日 長野県北佐久郡に生まれる
- 1909年 東京府立第二高等女学校入学
- 1914年 東京女子高等師範学校（現御茶の水女子大学）文科に入学
静岡県立三島高等女学校、麴町高等女学校勤務
- 1924年 東洋英和女学校に就任（国語科）
勤続42年（～1965年）
- 1977年5月15日 永眠（享年80歳）
遺稿集『手函』（1980年刊）